

青嶺 Seirei

文責 田中泰司

伊万里市立青嶺中学校

地震避難訓練で

感じたこと

先週、テストの合間を縫って地震避難訓練が実施されました。能登半島での大地震の直後でもあり、いつこの伊万里で発生しても不思議ではありません。特に二年生は災害について学習したばかりです。

私は避難してくる生徒たちを体育館で待っていました。しかし、その姿からは残念ながら緊張感を感じられませんでした。

校長は話す予定ではありませんでしたが、どうしても話さずにはいられません。同級生も亡くなっている事、こんなに加減な態度でいるなら、今地震が発生したら助からない人が出る事、私たち教師は一人も死なせたくない事。命に関わることを真剣に受け止め、取り組んでほしい。今、この時に感じ取り、自分中心に出来なかつたら、これから、ずっと出来ない

ままになってしまいます。

優しく、素直な生徒たちが災害でケガをしたり命を落としたりすることは、あつてはならないのです。だから、学校では常に生徒たちの安全の確保を、「どうすれば命が助かるのか」を真剣に考えているのです。

今回、私が「怒った」と驚いた人もいるかもしれませんが、そうではありません。心から、心の底から悲しかったのです。

命の危機に瀕した時、何が何でも助かるという強い意志が自分を救います。訓練の時から真剣に取り組み、自分の命を守るという強い意志を持ってください。絶対に命を落としてはならないのです。もう一度自分の事として向き合ってください。私の心からのお願いです。

「チーム」での責任

私の大学は文系の公立学校だったので、小規模で女子学生が多く、陸上部員は少なかったです。また二部（夜間）で働きながら走っている部員も何人かいて顔ぶれは豊かでした。今は島原半島で行われている九州学生駅伝は、当時

は阿蘇五岳の外輪山を走るコースでした。長距離だけではメンバーが足らず、短距離の選手だった私は二度、駅伝を走りました。最初は一年生の時、山下りの7・5キロでした。最初の5キロで三〇〇メートル下り残りは平坦です。

タスキをもらって最初の5キロで自己ベストを大きく更新していましたが、平坦になってからの記憶がほとんどありません。オーバースペースで脱水症状になっていたので。監督によるとふらふらと蛇行しながら走り、道から落ちそうになったそうです。

ほとんど意識がないまま中継地点にたどり着き、タスキをとって次の走者に渡そうとしましたが、繰り上げスタートで、先輩はもういませんでした。そのまま倒れこみ、付き添いの先輩から靴を脱がしてもらいましたが、足の裏の皮が三分の一近くめくれていました。繰り上げにはなったもののチームは最下位で完走しました。

駅伝でなければ棄権していません。でも駅伝だったからタスキをつなぐために責任感と義務感で走り切りました。「無理をしない」ことは個人なら大事ですが、チームではどうでしょうか？引き受けたからには「責任」「義務」を私は背負いたいと思います。

あるヒッチハイカー

これもまた旅の途中で会った人のこと。車で旅していた時、道路わきを一人の男性がヒッチハイクのサインを出しながら歩いていたので、気になって乗せることにしました。名前はロジャー、仕事を求めシドニーに向かっているということでした。

彼はロンドンで技術を身に付けたこと、今の仕事がひと段落ついたので、節約のためにヒッチハイクをしていることなどを話し、私も自分の事を話しました。会社で経理部にいたこと、結婚して父親になって仕事を辞めたこと、二年間無職で金に苦労したこと、今は教師になり仕事を楽しんでいること、黙って聞いていたロジャーが「It's Life」と一言。

そうだよなあ：それが人生だよなあ、となぜかしみじみ感慨にふけり、それからお互い言葉を交わさなかったのに、分り合えたような不思議な時間を過ごしました。

「出会い」は突然にやってきます。一時の偶然的出会いの気軽さからでしょうか、なぜか素直に人生を語ったり、ふつうな言いえないようなことを言ったり、ほんの少しの短いやりとりが、不思議と長い間心にとどま

ることがあるのです。

街はずれの、交通量が多くて車を拾いやすい場所に彼を降ろし、再び、それぞれが自分の旅を再開しました。

人生は別れ道の連続で予想がつかみません。未来はどうなるのか、誰にもわかりません。別れ道に遭遇したら、どの道を選び、進んでいくかを自分で決めなければなりません。

そうであるからこそ、自分の選択に責任をもち、努力を重ねて、後悔が少ないように生きていきたいですね。彼は、今はこの空の下で生きているのでしょうか。今でも時々、It's Life. とつぶやいたり、たときの彼の横顔を、ふっと思い出します。

校長室より

今日は雨が激しく降っています。今年は暖冬で、朝、生徒たちを出迎える時もずいぶん寒気が緩んできました。

ある生徒から「校長先生、今年は梅の花が早いですね」と話しかけられました。きっと家の人とそんな会話が交わされているのでしょう。季節の変化に気づき、言葉が訪れる喜びと、そこにある出会いと別れ。一年が足早に過ぎようとしていますが、生徒たちの豊かでみずみずしい感性に感心しつつ、過行く年を惜しんでいます。